

令和4年度厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)
管理栄養士養成施設における管理栄養士の卒前・卒後教育の充実に向けた研究
分担研究報告書

管理栄養士養成校の教育内容の実態に関するインタビュー調査

研究協力者	片岡 沙織	神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
研究協力者	飯田 綾香	神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
研究分担者	斎藤 トシ子	新潟大学大学院医歯学総合研究科・環境予防医学分野
研究分担者	上西 一弘	女子栄養大学栄養生理学研究室
研究分担者	加藤 昌彦	椋山女学園大学生生活科学部
研究分担者	神田 知子	同志社女子大学生生活学部
研究分担者	栗原 晶子	大阪公立大学生生活科学研究科
研究分担者	遠又 靖丈	神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
研究分担者	鈴木志保子	神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
研究代表者	中村 丁次	神奈川県立保健福祉大学

研究要旨

【目的】2000年栄養士法改正により、管理栄養士養成カリキュラムも大きく変更され、約20年が経過したが、現在の養成施設の教育に関する実態や、現場での教育ニーズは検証されていない。本研究では管理栄養士養成施設の主要教員から情報収集を行い、養成施設の教育(卒後教育を含む)に関する実態や教育ニーズを明らかにすることを目的に、管理栄養士養成施設の教員を対象にインタビューを実施した。

【方法】2022年8月から10月に管理栄養士養成校5校の臨地実習、臨床栄養学、公衆栄養学、大学院教育、進路支援の担当者にオンライン会議システム(Zoom)を用いた半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は逐語録を作成し、テキストマイニングツール(Text Mining Studio、(株)NTTデータ数理システム)によりことばネットワーク分析を行った。

【結果及び考察】臨地実習については、臨床栄養学において医療職として管理栄養士が活躍するためには長期間が必要であると考える一方、現状のカリキュラムでは難しいとの意見が多かった。また、公衆栄養学では、大学と自治体との関係性により、実習内容の質にばらつきがあることがわかった。教育ニーズ・教育内容については、導入教育を含めた体系的な教育や卒後の見通しを学生自身がイメージできるような教育、学部から学び続ける姿勢を身に付けさせることの必要性について言及されていた。管理栄養士養成を6年に延長すべきかの議論において、教員は管理栄養士養成に $+\alpha$ の教育の必要性を感じていた。ただし、管理栄養士の社会的評価や認知度を考慮すると、現段階での6年制への移行は現実的ではなく、代替策を検討する必要がある。今後、これらを踏まえ、管理栄養士養成の質を向上させていくための検討が必要である。

A. 研究目的

栄養士法の一部を改正する法律(平成12年法律第38号)の施行に伴い、管理栄養士の業務として「管理栄養士の名称を用いて、傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、個人の身体の状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導並びに特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体の状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うことを業とする

者」に改められて以降、医療・介護領域をはじめとして、管理栄養士の職務のあり方は、従来の給食管理から大きく変化している。法改正により、管理栄養士養成カリキュラムも大きく変更され、約20年が経過したが、現在の養成施設の教育に関する実態や、現場での教育ニーズは検証されていない。

本研究では管理栄養士養成施設の主要教員(臨地実習担当者)等から情報収集を行い、養成施設の教育(卒後教育を含む)に関する実態や教育ニーズを明らかにすることを目的に、管理栄養士養成施設の教員を対象にインタビューを実施した。

B. 研究方法

1. 調査対象及び調査方法

2022年8月から10月に管理栄養士養成校5校へインタビューを実施した。

対象者は、各大学の臨地実習、臨床栄養学、公衆栄養学、大学院教育、進路支援の担当者とした。大学によって担当者にばらつきがあるため、各大学の代表者に担当者の選定を依頼した。

対象者に依頼状、説明書（インタビューガイド含む）、同意書、同意撤回書を送付した。調査への協力は対象者の自由な意志に任せられ、同意書を回収した。同意が得られた対象者に臨地実習の時間数やアドミッションポリシー等の内容を含む事前調査票の回答をもらい、それを基にインタビューを実施した。

事前調査票の情報及びインタビューガイドに基づき、研究分担者及び研究協力者がオンライン会議システム（Zoom）を用い、約1時間の半構造化面接によるインタビューを実施した。インタビューガイドは、1) 学部教育基本情報に関するインタビュー、2) 大学院教育の基本情報に関するインタビュー、3) 教育ニーズ・教育内容の実態との整合性を明らかにするためのインタビューに分けられ、1)・2) に関しては対象者の担当部分、3) に関しては対象者全員へインタビューを行った（表2）。

インタビュー内容は対象者の同意を得て録音し、逐語録を作成した。得られた逐語録をインタビューガイドの項目ごとに分類し、テキストマイニングツールである Text Mining Studio（株式会社NTTデータ数理システム、東京）を用いた。電子化されたデータについて「分かち書き」を行った。これにより品詞分解が行われた。その後、テキスト全体の関連性を見出すために「ことばネットワーク分析」を行った。ことばネットワーク分析では、断片的なデータでは得られない言葉について、因果関係が矢印の向きと太さでビジュアルに表される。各項目に対し、行もしくは文章での抽出を行い、クラスター数が2から12程度になるように設定を行った。

2. 倫理的配慮

調査は神奈川県立保健福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：保大第5-21-30）。

C. 研究結果

対象者は各大学3～5名、計18名であった。

1. 臨床栄養学臨地実習

学部教育基本情報に関するインタビューのうち、臨床栄養学臨地実習に関することばネットワークの結果の一部を図1から図3に示した。

インタビュー対象校は、「給食経営管理論と合わせて3週間の実習か」の質問に対し、臨床栄養学のみ3週間（ただし、臨床栄養の一環としての給食経営管理含む）の大学、臨床栄養学3週間（3単位）のうち、給食の運営を1単位含む大学、臨床栄養学臨地実習のみ2週間と給食経理管理1週間を別々に実施する大学、学生によって組み合わせを選択性に行っている大学などであった。

「管理栄養士の養成として、本当は臨地実習のカリキュラムをどのようにしたいか」では、8つのクラスターに分類された（図1）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「思う」「いう」「実習期間」「短い」「学習」「受け入れ」「良い+ない」
- ・「1日」「機会」「低学年」「つくる」「しれる+ない」
- ・「指導者」「研修」「受ける」
- ・「仕事」「重要」
- ・「4年生」「選択」

「現時点で臨地実習の時間数を長くすることはできるか」では、3つのクラスターに分類された（図2）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「思う」「いう」「2週間」「3週間」「大学」「難しい」
- ・「増やす」「実習先」「時間」「確保」

「臨地実習の時間数を長くすることが難しい場合、何が足かせになっているか」では、3つのクラスターに分類された（図3）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「いう」「4年」「期間」「難しい」「特徴」「カリキュラム」「3年生」「管理栄養士」「病院+ない」「4年間」等、「学生」「人数」「施設数」「思考」等。
- ・「栄養教諭」「家庭科」「先生」

2. 公衆栄養学臨地実習

学部教育基本情報に関するインタビューのうち、公衆栄養学臨地実習に関することばネットワークの結果の一部を図4及び図5に示した。

「大学もしくは大学間で実習内容の取り決

めをしているか（市町村の事業を見学する等）」では、12つのクラスタに分類された（図4）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「いう」「5日間」「学び+したい」「事業」「いく+ない」「機会」「評価」「入れる」「考える」「悪い」「説明+したい」「やる+したい」「お願い」「問題」等。
- ・「強い」「要望」「先方」
- ・「協議会」「意見」「内容」
- ・「プログラム」「お願い+したい」「説明」「先生」
- ・「意見交換」「情報共有」「実習先」「養成校」
- ・「保健所」「先生方」「管理栄養士さん」「連携」「市町村」「行く」「分かる+ない」「分かる」
- ・「作る」「評価票」「自己チェック表」「思う」「大事」「一緒」
- ・「いる」「行政」「必要」「理解」「教員」「管理栄養士」
- ・「Zoom」「使う+できる」。
- ・「良い」「見学+ない」「プラスアルファ」「カリキュラム」
- ・「一堂」「会する」

「自習時間が長いと感じているか」では、9つのクラスタに分類された（図5）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「いう」「しれる+ない」「関わる」「5日間」「養成校」「協議会」「受け入れる」「頼む」「席」「対人」「来る」「良い」等
- ・「思う」「達する」「充実」「厳しい」「現状」
- ・「作業」「時間」「多い」「学生」「分かる+ない」「現場」「見る」等
- ・「やる」「自分」「司会」「コロナ」「状況」「考える」「カリキュラム」
- ・「1ヵ月」「置く+したい」「言い方」
- ・「栄養士」「仕事」「見せる+できる」

3. コロナ禍の対応

学部教育基本情報に関するインタビューのうち、コロナ禍における臨地実習の対応に関することばネットワークの結果を図6から図8に示した。

「コロナ禍の臨地実習において、どのような対応策が大学で実施されたか」では、8つのクラスタに分類された（図6）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「やる+したい」「大学」「取り組む」「Zoom」「教える」「給食」「やりとり」「提出」「切り替える」等
- ・「健康管理対策」「大きい」「思う」

・「学生」「実習」「中止」「立てる」「出す」「質問」「展開」「献立」「経験」「お願い」等

- ・「オンライン」「つなぐ」「先方」「変わる」「講義」「多い」
- ・「言う」「1週間」「分かる+ない」が繋がっていた。

「新型コロナウイルス蔓延前と比較し、臨地実習においてどのような点で変化があったか」では、8つのクラスタに分類された（図7）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「いう」「分かる+ない」「空気感」「機会」「要望」「病院実習」「感じる」「学生」「コロナ禍」「多い」「管理栄養士」
- ・「変わる+ない」「少ない」
- ・「理解」「部分」「見る」「学内」
- ・「貴重」「思う」「意味」「経験+できる」「患者さん」「印象」「現場」「医療職」「オンライン」「分野」
- ・「実習」「講義」「コロナ前」
- ・「健診」「見学」

「新型コロナウイルスの影響を経て、実習に関してどのような考察が得られたか」では、8つのクラスタに分類された（図8）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「いう」「不測」「栄養管理室」「事態」「対面+ない」「プラス」「ほったらかし」
- ・「先方」「意見」「伝わる+ない」「通ずる+ない」
- ・「思う」「増える」「Zoom」「相手」「なくなる」「良い」「オンライン」「活用」「海外」
- ・「病院」「行く+したい」「実習」「公衆栄養」
- ・「現場」「しれる+ない」「差」「職種」「余計」
- ・「分かる+ない」「改革」「経営管理」「授業」

4. 教育ニーズ・教育内容

教育ニーズ・教育内容の実態との整合性を明らかにするためのインタビューに関する、ことばネットワークの結果を図9から図13に示した。

「管理栄養士の修業年限を4年から6年に延長すべきか」では、7つのクラスタに分類された（図9）。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「管理栄養士」「大学」「現実」「力」「4プラス2」「領域」「時代」「実務家」「栄養士」「メリット」「給料」
- ・「大学院」「最低限」「業務」「学部」「6年必要」「食」「考え」「医療」「薬剤師」

- ・「分野」「臨床」「プラス2年」
- ・「社会」「学生」「インターンシップ」「質」「現場」「修士課程」「社会的評価」「学内」「職種」「問題」「カリキュラム」
- ・「自分」「形」「知識」「一定数」「状況」「人」「課題」「卒業生」「病院」「環境」
- ・「資格」「先生」「理想」
- ・「専門性」「ニーズ」「現状」「公衆栄養」「修士」

「管理栄養士の資格を活かして働くために学部教育においてどのような教育内容が必要か」では、8つのクラスタに分類された(図10)。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「管理栄養士」「自分」「学部」「科目」「課題」「学科」「機会」「食品学」「教材」「グループワーク」「栄養教育」「学外」「科目+ない」「力」「社会」「管理栄養士+ない」
- ・「大学」「立場」「問題」「管理栄養士さん」「人」「時点」「臨地実習」「看護学部」「文章」
- ・「感じ」「職種」
- ・「先生」「状態」「仲間」「現実」「患者さん」「部分」「ベース」「病院」
- ・「卒業研究」「進路」「食品」「カリキュラム」「情報」「段階」「形」「方向」「気持ち」
- ・「学生」「人間」「地域」「教員」「内容」「流れ」「空気」「卒業生」
- ・「知識」「外」「国家試験」「現場」「学内」「理想」「印象」

「管理栄養士の資格を活かして働くために卒業後教育においてどのような教育内容が必要か」では、8つのクラスタに分類された(図11)。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「大学」「先生」「講師」「機会」「ニーズ」「大学院」「卒業生」「自分」「専門性」「学生」
 - ・「栄養士会」「場」「企業」「先輩」「教員」「学会」
 - ・「管理栄養士」「姿勢」「職種」「人」「行政」「現場」「社会」「自分自身」「知識」
 - ・「同窓会」「栄養士」「学内」「テーマ」「コース」「力」「マネジメント」「卒業生+ない」
- 「栄養の専門職として、生涯にわたり自己研鑽する意欲を持つためにはどのような教育が必要か」では、3つのクラスタに分類された(図12)。共起関係のまとめを以下に示す。
- ・「機会」「知識」「栄養士会」「思い」「声」「人」「行政」「場面」
 - ・「現場」「先生」「周り」「臨床」「場」「社会」
 - ・「学生」「情報」「教員」「管理栄養士」「病

院」「感じ」「大学」「卒業生」

「入学前と卒業時のギャップについて」では、では、7つのクラスタに分類された(図13)。共起関係のまとめを以下に示す。

- ・「管理栄養士」を中心に「現場」「一定数」「高校生」「印象」「ギャップ」「導入教育」「管理栄養士+したい」「気持ち」「国家試験」「形+ない」「食品」「分野」「全体」
- ・「感じ」「患者さん」「人たち」「高齢者」「臨地実習」「方向」「給料」「出身」「興味」「女子大」「企業」「学校」が繋がっていた。
- ・「現実」「偏差値」「考え」「魅力」「資格」
- ・「スポーツ栄養」「栄養士さん」「会社」「食品会社」「道」「保育園」「答え」「行政」「学生」「興味+ない」「食品開発」「栄養士」「人」「学生さん」
- ・「病院」「特徴」「大学」「形」「力」「モチベーション」「先生」「理由」「大学院」
- ・「学生」「親」「家族」「内容」「段階」「知識」「社会」「姿」「どういうこと」
- ・「オープンキャンパス」「教員」「入学時」

D. 考察

1. 臨床栄養学臨地実習

管理栄養士養成施設における臨地実習要領では、「臨床栄養学」「公衆栄養学」「給食経営管理論」で4単位以上とし、「給食の運営」に係る校外実習の1単位を含むものとする¹⁾と定められている¹⁾。インタビュー対象校は、臨床栄養学のみ3週間(3単位)の大学、臨床栄養学3週間(3単位)に給食の運営を1単位含む大学、臨床栄養学臨地実習のみ2週間(2単位)実施する大学、学生によって組み合わせを選択性に行っている大学など様々であり、学生によっては臨床栄養学臨地実習の履修状況に差が生じている可能性が考えられた。本研究では管理栄養士養成校5校の調査であったため、全国的には臨床栄養学臨地実習を1単位とする大学も存在することが想定される²⁾。

カリキュラムの希望は、ことばネットワークの結果に関連した原文(一部省略)を抽出したところ、「低学年で見学に行くとか、意識づける機会をつくってみると、少し視点というか、入学後に自分が医療職として働いていくっていう意識が高まっていくと思う」、「病院で将来的に努めたい希望者に関しては、もう少し実習期間が長くあればあるほどいいと思う」といった導入教育と実習期間の長さに関する意見が挙げられた。最近では、特定機能病院で管理栄養士の病棟配置や周術期の栄養管理等、令和4年度

診療報酬の改定が行われている³⁾。2000年の栄養士法改正に伴う教育課程変更は2002年から行われ、現在の臨地実習時間(180時間(4単位)以上)となって20年が経過しているが、他の医療職種と比較しても2、3週間という短期間の臨床現場の臨地実習では、現在の医療現場の変化に対応できないことが推測される。管理栄養士養成校として、学部教育や臨地実習の在り方に対して何らかの対応をしていく必要があると考えられる。臨地実習の長さについての回答では、「臨床の分野だけで言うと、2週間実習に行った学生よりも、3週間実習に行った学生のほうが、理解度が違っていると肌で感じる」との意見もあった。

一方、「現時点で臨地実習の時間数を長くすることはできるか」「足かせは何か」という問いでは、それぞれ「実習時間を4年の中で確保するのは、臨床に行くとなると、これ以上、増やすのは難しいと思う」、「学生の人数と施設数」等の意見があった。

さらに、カリキュラムの希望では「共通認識を持つために、学外指導者であっても、ある程度、一定の理解のために何か研修、講習を受けていただくのが制度化されると思う」、「受け入れ先の病院の体制、教育体制が、なかなか難しい」という意見も上がった。養成校によって、臨地実習時間にばらつきがあることを考えると、全国の管理栄養士養成をある程度標準化するためにも、臨地実習の質という側面から、受け入れ側の管理栄養士の教育制度や、プリセプター基準を設けた制度等といった検討が必要かもしれない。

2. 公衆栄養学臨地実習

実習の取り決めは自治体と大学で行っている養成校もあったが、最終的には実習先との調整が多かった。県内養成校で担当者会議を行っている県や、県内養成校と行政とで臨地実習に関する会議を行っている県もいくつか存在した。ただし、臨地実習の改善点を協議しあう前向きな会議を行っている県もあれば、一方で、「実習内容の意見交換というよりは、実習先からこのような要望がありましたという情報共有」「先方の要望を聞く方が強い」というように一方的な情報共有に留まっている県も見受けられ、実習内容の依頼や要望を伝えづらい自治体が存在することが明らかになった。

実習内容の依頼や要望ができていない大学からは、「こちらのお願いしたいことを説明

した上で、後はお任せで、それぞれの先生がプログラムを組んでくださる」「県内の養成校で共通の評価表と自己チェック表がある。実習先から要望があり作成された。いろいろな養成校が実習先に来るし、一つの実習先に二つの養成校の学生が行くこともあるので、評価表がばらばらだと評価しにくいということがあり、実習先の声を受けて統一したものを作った。受け入れ先の先生方は、自己チェック表を見ながら、できるだけ全部経験させてあげたいと思って日程を組んでくださっていると思う」と語っていた。実習時期によって、行われている事業は異なることから、実習内容として行ってほしいことは各自自治体に伝えるが、具体的な事業は自治体に任せていた。例えば、「必ず学生がその施設のPDCAのサイクルを分かるような形の実習をご検討いただきたい。ただし、全部見られないとしたら、今回、見せる部分は、例えば、PDのDですとか。後は実際にPを見せるとか。終わってしまったけどCheckのところを見せるとか。そういう説明もしてくださいというふうに、そういう学びをさせていただきたいということをお願いしている」というように、短期間の実習であっても、行政の業務の全体像と関連づけて、学生が理解できるように依頼していた。

以上より、公衆栄養学臨地実習の内容や質については、大学による差が大きいことが推測されたが、実習先である自治体の影響も大きいことが考えられた。

臨地実習中の自習時間については、実習先、実習時期等によって異なるとの意見が挙がった。保健所と保健センターの性質の違いや、実際に指導している管理栄養士・栄養士によっても差が発生しているようだった。前述のように、実習内容の依頼や要望を伝えている大学であっても、「こもって作業する時間は当然ある。あまり長いと学内でやっても同じですよね、課題だけもらってきて」「作業の前後とか作業中にやったことをちゃんと聞いてくださって、質問を受けるような時間を設けてくださるとか、すごく大変なことだと思うけど、丁寧にやってくだされば、そのやり方もある程度はありだと思いが、そのフォローがないと、学生としては実習行ったけど、現場が見られなかったみたいになる」「いかに、いろんな人が来て、ばたばたしているかということを理解させるために、1人ずつ、半日でもいいから、事務室に座らせてくれて頼んであ

るんです、空いてる席に」といった意見が挙げられた。他の大学においても、「本当に変な言い方なんです、何でもお手伝いするので、1カ月ぐらい学生1人ずつ置いてくださいっていうのが理想」というように、学生が限られた臨地実習期間の中で、現場の全体像を把握、理解することは限度があると考えられる。短期間で理解度を上げるためには、ある程度、内容を標準化する工夫が全国的に必要であると推測される。

3. コロナ禍における臨地実習の対応

コロナ禍の臨地実習状況は大学あるいは実習先によって異なっていた。以下、()内は各科目の担当を示す。

対策は、「(臨床) 実習の準備ということになるかと思うが、健康管理対策が非常に大きかったと思う」「学生には毎日の健康管理表をつけさせるというようなことや、それから当然アルバイトの禁止であるとか」というように、実際に実習先に行く場合は厳重な健康管理対策が行われていた。

実習が中止となった場合は、可能であれば他に受け入れ可能な病院への振替、実習延期、オンラインで実習先に指導してもらい、学内教員で実習内容を検討して学内で実施する対応がとられていた。

オンラインでは、例えば「(臨床) 献立の立て方を指導していただいて、学生が献立を立てたり展開したりっていうのを、それを提出したのに対してフィードバックをいただくっていう形の実習だったり。後は、Zoom みたいなテレビ会議みたいなので講義をしていただくということがあった」という内容が挙げられた。学内実習への振替では、「(臨床) 実習施設から、どうしても実習中止という場合には、該当する学生は医療施設での栄養基準や献立の展開、模擬患者症例の栄養指導計画の立案とかロールプレイ、模擬患者症例の栄養管理計画、NST などにおけるロールプレイなどを実務家教員が担当するという形で行った」等の対応がとられていた。

新型コロナウイルス蔓延による臨地実習変化において、臨床栄養分野では、「(臨床) 患者さんと接したりとか、コミュニケーションとったりとか、他の医療職の方とかと現場の空気感というのは、多分、オンラインではなかなか分からないという印象」「(大学院) 百聞は一見にしかずではないが、実際に生で見たものがある学生と完全学内振替になった者では、人への対処の仕方であった

りとか、空気感っていうんですかね、臨床現場のその辺りの理解度は少し違うのかなというのは、学生を見ているところで感じた部分」「(臨床) 他の医療職とか患者さんからも見られているという意識はオンラインでは絶対にできないと思う」というように、患者や他の医療職とのコミュニケーションや現場の空気感を学生が学ぶことができないという点の変化として挙げられた。

オンラインの活用については、「(公衆) 課題だけやってほったらかしっていう所もあるにはあったので、そこはもうちょっと見てほしいっていうことはあった。場合によっては、Zoom などで繋いでやろうと思えばできるので、講義だったらオンラインを使ってもいいかなと思っている。先方の意見もあったが、やっぱりオンラインだと伝わらない部分というのがかなりあったので」というように、講義については肯定的な意見が挙げられたが、一方でオンラインのみでは学生に伝わらない部分が生じてしまうことが述べられていた。さらに、「(給食) 病院なんかで見ていると、今の薬剤師は要するに6年間になった部分の2年間が現場の経験っていうのもある。看護師の実習の期間なんて、まだいるのっていうぐらい長いわけだから、そうしたらやっぱり、はっきりと差は出る。その差がある状態で行ったら、太刀打ちできるはずない」と実習期間の長さを言及した者もいた。

また、コロナ禍を経て、「(公衆・大学院) 不測の事態に対応する対応力みたいなことが本当に管理栄養士として必要だということ学ぶのには、もしかするとこの状況っていうのは、いいことなのか、プラスはあるのかなと思った」といった不測の事態への対応力の必要性について言及していた者もいた。

4. 教育ニーズ・教育内容の実態

管理栄養士の修業年限を4年から6年に延長すべきかでは、「(臨床) 卒業生によっては、そこまで必要がないっていう学生もいると思うので、一律6年っていうのは求めないが、自分が求める道によっては6年必要かと思う」「(公衆・大学院) 全員を6年にする必要はないと思うが、社会でリーダーシップを取って行くためには、6年必要と思うので、一定数の管理栄養士は、やっぱり、6年養成。今後、6年養成にはならないと思うが、4プラス2っていう形で6年までやって、現場に行く」という、全員には課さな

いが、4年+2年の考え方の意見が挙がった。さらに、「(臨床) 臨床栄養学の分野に関しては、プラス2年の就業年数というのはどうしても必要になっていうふうにちょっと思う。大学院の修士レベルということ」と、領域による意見もあった。

また、6年制にするには、「(大学院) 管理栄養士の仕事というのは非常に重要な、命に関わるというか健康に関わる、健やかな成長に関わる重要な仕事だと、本当に大事な仕事だと思うが、その割に社会的評価がなされていない中で、6年制っていうのは、時期尚早という気はする。それだけ授業料払って、資格を取ってということになると、まだ社会との間にギャップがあると思う」 「(公衆) 現実問題として栄養士さんと管理栄養士さんで就職する場所が今一緒になりつつあるような気がする。栄養士なのか管理栄養士なのかちょっとクエスチョンな職業になっていて。本当に管理栄養士だったら多分、専門的なことがいえるとか専門的なことが分かってないといけないと思うが、結局やっていることが栄養士と同じ管理栄養士になっているようなところがあるので。そう考えると本当に栄養士さん、管理栄養士さんを分けるのは、もしかしたら結構大事なのかなと思う」という管理栄養士の社会的評価やギャップに関する意見がいくつか挙がった。

6年制にすることによる管理栄養士の報酬について、「(臨床) まずは給料面。これは、管理栄養士職は給料が安いから就職しない方がいいという先輩から後輩の悪い流れというのがある」 「(大学院) 管理栄養士は給料が安いとか、仕事が大変だとか、そういうマイナスな面もいろいろあると思うが、6年間勉強したことに見合ったものがある、約束されているというのがないと、6年間、時間とお金を使ったのに、こんな仕事しかできないのかというところが、まず率直なところあるなという気がする」 「(給食) 6年制にすることはいいと思う。ただ6年制で6年までいて、それに見合う給料が支払われるかというのがちょっと、大学院卒並みの給料という扱いを受けるかどうかというのが、相手先によるのかもしれないけれども」と言及された。

以上より、養成校の教員において、管理栄養士養成には6年制あるいは4年プラス2年の教育の必要性を感じていた。ただし、管理栄養士の社会的評価や認知度等を考慮すると、6年制への現段階での移行は現実的で

なく、代替策を検討する必要がある。

管理栄養士の資格を活かして働くために学部教育においてどのような教育内容が必要かでは、内容に関する言及と方法に関する言及があった。「(公衆) 栄養のことだけはメインでやってきているので分かるけど、それ以外のとが見えないから、なんかちょっと引け目を感じてしまったりするときもあるように感じるので、本当に対等な医療職種というような形にするのであれば、もうちょっと幅広く知る機会っていうのは必要だと思う」 「(臨床) 生身の人間と接していろんな連携をするための教育、もっと基本的なところを、教員もそうだが学生にもちゃんと認識してもらおう」 「(給食) 食品学でもなく、調理学でもなく、食事学というか、あるいは食事計画論みたいな、それが必要。多職種になり、管理栄養士ならではの部分として、栄養の課題を解決するために、具体的な食事に落とし込める。それを体系的に教える科目がない」等といった、幅広い知識の習得の他、それぞれの学問を体系的に身に付ける必要性が述べられていた。方法では、「(臨床) 若手の卒業生で、社会で活躍している方々とグループワークを行う」 「(公衆) 真摯に患者さんなり対象者の方に向き合うには、努力していかないといけない。それは1人で努力するのではなく、伝手だとか仲間でやったほうがいいのかもかもしれない。その一番ベースの部分で大学を考えてもらえれば、未来ができるかなというような感じがする」といった仲間との交流の他、導入教育や卒後の見通しを学生自身がイメージできるような教育についても言及されていた。

さらに、卒業研究において、「(臨床) 今の管理栄養士が働く職場に関して、情報発信を、管理栄養士として働くことでどのような有益性があるのか、有用性がもう少し情報発信できたらと思うので、そういった研究能力、研究を行って情報を発信する能力というのをつけていかないといけないと思う。理想としては、卒業研究を、みんな、してもらえたらとは思う」といった発言が見られた。先行研究では、現役管理栄養士が学生時代に学んでおく必要があった(不足していた)教育内容において、学術論文・学会発表と回答した者が多く、研究手法を学び直している者が多かった⁴⁾。管理栄養士の業務は高度化され、業務の見える化やエビデンスの創出が求められていることから、研究能力や情報発信能力の習得が求められて

いると考えられる。

卒業教育においては、「(大学院) 何か定期的にそういうのを開催して、その分野の面白い話をしてくれそうな先生を講師に呼んで、講演会をやるとか。ついでに、卒業生が集まるような機会になってというのが、本当はあったほうがいいのか」「栄養士会でされている講習会とか結構あるので。積極的に出るようになると一番いいのかなと思う。そこでつながって仲間ができたりしてってあったりする。できたらそういうところに入っていけるようにというところは、卒業教育とていうところでも、卒業前に学生さんにしっかり言うておくことは大事なのかなと思う」といった、栄養士会や大学、同窓会を活用した卒業教育が述べられていた。その他、生涯にわたり自己研鑽する意欲を持つためにはという項目では、「(卒業研究) 新しくなっていく知識をどうやって入手するかっていうことだが、やっぱり学会に入るとか、栄養士会に入るとか、卒業したての頃には思わない。お金のことも恐らくあると思うが、自己投資というか、そこまで思いが至らない人たちがいるので、そういう意味では、大学がいろんな学ぶ機会を提供しているということを知ってほしい」と卒業教育の結果と繋がっていた。「(公衆・院) 常にアップデートしている社会も制度もそれからエビデンスというか、研究の成果も。それを常に学んでいかなきゃいけないというような、そういう姿勢を身に付けさせる」と述べられているように、学部の中から学び続ける姿勢を身に付けさせることも必要である。

入学前と卒業時のギャップについては、「(公衆・院) うち是最初から、本当に管理栄養士になりたいっていう子が多い。ただ、なりたいたって思っていたのが、例えば、自分の経験で、前は学校給食とって思っていたけど、いや、高齢者の方がやりたくなるとか。そういうふうになるのはある。もちろん、たまに、全然方向が違いましたとかっていう子が、いることはいるが、割と少ないんじゃないかなと思う」という者がいた。

一方、ネガティブなギャップも多数存在した。「(公衆) あまり管理栄養士に興味なかったとか、栄養士とかあんまり知らなかったけど、とりあえず入れたから入ってきたという学生さんは、あんまり管理栄養士に興味がなくて。最後まで管理栄養士の国家試験も悩んじゃうぐらいの学生さんもいる。その辺は、学校の教育とのギャップがあっ

て、入学前と卒業時点と卒業後とでちょっと違う」「(給食) 国家試験、学科が管理栄養だし、それに何となく全体で受けるよね、当たり前なんだよねみたいな。そういう部分があるんじゃないかなと思う」「(臨床) 数名は、本当に管理栄養士というイメージで入ってきたけれども、やっぱりイメージと違うとか、過酷な仕事で給料が安いとかというのもあり、正直申し上げると、半分以上は最初から管理栄養士に興味ない人間が入っていると思っている。単純に、要は農学部とか薬学部とかに偏差値やセンターの点数が足りないの、落ちてきた人間っていうのが半分以上いる」「(臨地実習担当) 数年前までは、モチベーションが低い学生も高い学生もそれなりに管理栄養士の職について入っていたと思うが、この数年を見ていると、まず入った段階で企業を志望している。栄養士じゃなくて企業に入りたいたっていうのがもともと多い大学ではあったが、栄養士は取りたい、管理栄養士も取りたい。だけど、就職先は別に管理栄養士である必要はないっていう、使えたらいいなぐらいの感覚っていうのはすごく感じている」といように、そもそも管理栄養士を目指していない学生や、資格のみを取得する学生が一定数いる大学があることが明らかになった。

また、そのほかの意見として、「(公衆) 半数以上がスポーツ栄養をやりたいと入学してくるが、出口が全く違う。学生なりに折り合いをつけて、学んだことは全く無駄ではないので、いろんな職域でも使えることだし」「(卒業研究) 1年生、2年生あたりで1回落ち込むのですよね、全体が。管理栄養士なんて絶対ならないぞみたいな。こんなに大変な勉強をして、そんなに明るい仕事じゃないっていうか。ブラックな仕事もたくさんあるのでというのがだんだん見えてくると、いったん気持ちが離れるみたいなんですけど、やっぱり臨地実習に行くと変わる。本当に働く人たちの、先輩の姿を見たり、目の前に患者さんがいたり、高齢者がいたりという、自分たちがどういうことに貢献できるのかっていうことが分かると、だいぶ変わるっていう気がする」と入学時の管理栄養士のイメージと異なる学生もいるが、臨地実習を通して、管理栄養士の意義を理解し、持ち直す学生も存在することがわかった。

「(臨床) 管理栄養士職、1日とか2日とか短期体験みたいな感じで、いろんな管理栄養士免許を生かして、こんな仕事をして

いる人とか呼んできたり、逆にちょっと学外、1日だけ行かせてもらったりという形で、そういう選択肢が、いろんな楽しい仕事があるよっていうことをしっかりと紹介というか、そういうカリキュラムの教育を受けている人間のほうが圧倒的に、4年後に管理栄養士職で就職する。後は、教員の構成とかも関係あると思いますね。非管理栄養士の教員の率が上がれば上がるほど、当然その人たちは管理栄養士の仕事は何も知らないから、教員側がそんな給料が安くて過酷だから、民間企業の食品開発行ったほうがいいぞ、とかいうふうに誘導している人も中にはいる」との意見も挙がり、管理栄養士養成校の教員の質、教育についても言及されていた。

E. 結論

管理栄養士養成施設の教育（卒後教育を含む）に関する実態や教育ニーズを明らかにすることを目的に、養成施設の主要教員（臨地実習担当者等）を対象にインタビューを実施した。管理栄養士の修業年限を4年から6年に延長すべきかの議論では、管理栄養士養成には $+\alpha$ の教育の必要性を感じていた。ただし、管理栄養士の社会的評価や認知度、報酬等を考慮すると、6年制への現段階での移行は現実的でなく、代替策を検討する必要がある。管理栄養士の資格を活かして働くためにはという項目では、導入教育を含めた体系的な教育や、卒後の見通しを学生自身がイメージできるような教育、学部から学び続ける姿勢を身に付けさせることの必要性について言及されていた。今後、これらを踏まえ、管理栄養士養成の質を向上させていくための検討が必要である。

F. 謝辞

インタビューにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

引用文献

- 1) 厚生労働省：管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習について（平成14年4月1日14文科高第27号・健発第0401009号文部科学省高等教育局長・厚生労働省健康局長通知）
- 2) 公益社団法人日本栄養士会・一般社団法人全国栄養士養成施設協会編：臨地実習及び校外実習の実際（2014年版）。

<https://www.dietitian.or.jp/assets/data/learn/marterial/h26rinchi-ma00all.pdf>

（2023年5月3日アクセス）

- 3) 厚生労働省保険局医療課：令和4年度診療報酬改定の概要（栄養関係）。

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001003511.pdf>

（2023年5月3日アクセス）

- 4) 飯田綾香、中西朋子、小切間美保、林芙美、北島幸枝、大久保公美、鈴木志保子：現役管理栄養士が考える卒前・卒後に必要な教育内容。栄養学雑誌 77、S78-S88、2019

表1 インタビューガイド

	質問項目
1)学部教育基本情報に関するインタビュー	臨床栄養学臨地実習について
	・担当教員の臨床栄養分野における実務経験(3年以上)について
	・担当教員の博士号について
	・給食経営管理論と合わせて3週間の実習か
	・実習先の決定方法(大学が指定する施設もしくは学生が探してくる施設)
	・臨地実習先の病院、介護老人保健施設、特別養護老人ホームの割合
	・どのような病院・施設に学生を配置しているか
	・臨地実習先の施設要件は何か
	・実習監督管理栄養士の条件について
	・臨地実習中における中間評価の有無(評価表があるか)
	・院内での症例検討
	・臨地実習報告会(症例報告会)について
	・学内における事前指導について
	・学内における事後指導について
	・実習施設数
	・実習先の内訳(病院・特養・老健など)
	・栄養ケアマネジメント(給食経営管理、栄養指導以外)の実習内容が必須であるか
	・管理栄養士の養成として、本当は臨地実習のカリキュラムをどのようにしたいか
	・どのような実習だったか学生に聞き取りを実施しているか
	・現時点で臨地実習の時間数を長くすることはできるか
	・上記で難しいと答えた場合、どのようなことが足かせになっているか
	公衆栄養学臨地実習について
	・担当教員の公衆栄養分野における実務経験(3年以上)について
	・担当教員の博士号について
	・実習先の決定方法
	・実習監督管理栄養士の条件について
	・大学もしくは大学間で実習内容の取り決めをしているか(市町村の事業を見学する等)
	・自習時間が長いと感じているか
	コロナ禍における臨地実習の対応について
	・コロナ禍の臨地実習において、どのような対応策が大学で実施されたか
	・新型コロナウイルス蔓延前と比較し、臨地実習においてどのような点で変化があったか
	・新型コロナウイルスの影響を経て、実習に関してどのような考察が得られたか
卒業研究について	
・卒業研究の期間	
・卒業論文について	
・卒業研究は計画のみで終了しているか	
・1人1本の卒業論文を仕上げるか	
2)大学院教育の基本情報に関するインタビュー	修士課程について
	・定員に対する実際の学生数
	・社会人大学院生の制度について
	・社会人入学者の有無と学生が所属している領域(臨床・行政等)
	・臨床栄養に関する資格取得コースがあるか
	博士課程について
	・定員に対する実際の学生数
	・社会人大学院生の制度について
	・社会人入学者の有無と学生が所属している領域(臨床・行政等)
	・臨床栄養に関する資格取得コースがあるか
修士・博士課程について	
・フィールドワークの有無および期間	
・インターンシップの有無および期間	
3)教育ニーズ・教育内容の実態との整合性を明らかにするためのインタビュー	・管理栄養士の修業年限を4年から6年に延長すべきか
	・管理栄養士の資格を活かして働くために学部教育においてどのような教育内容が必要か
	・管理栄養士の資格を活かして働くために卒業教育においてどのような教育内容が必要か
	・栄養の専門職として、生涯にわたり自己研鑽する意欲を持つためにはどのような教育が必要か
	・入学前と卒業時のギャップについて

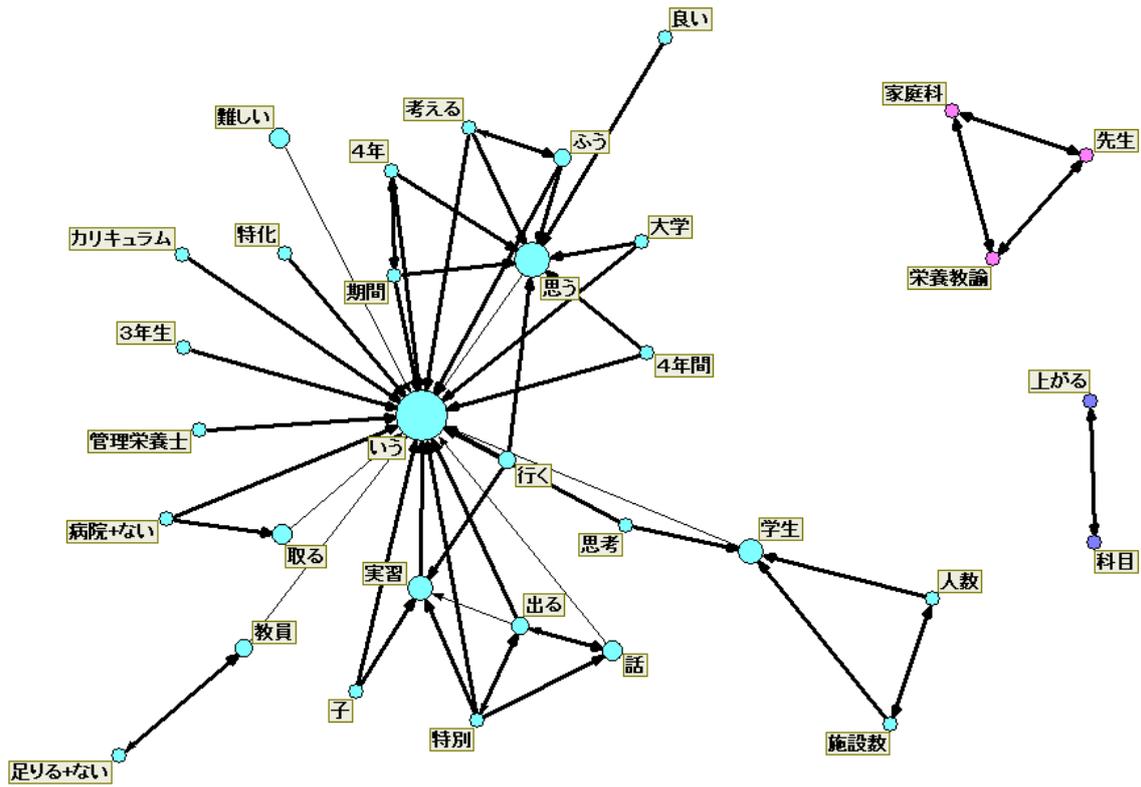


図3 何が足かせになっているか（臨床栄養学臨地実習）

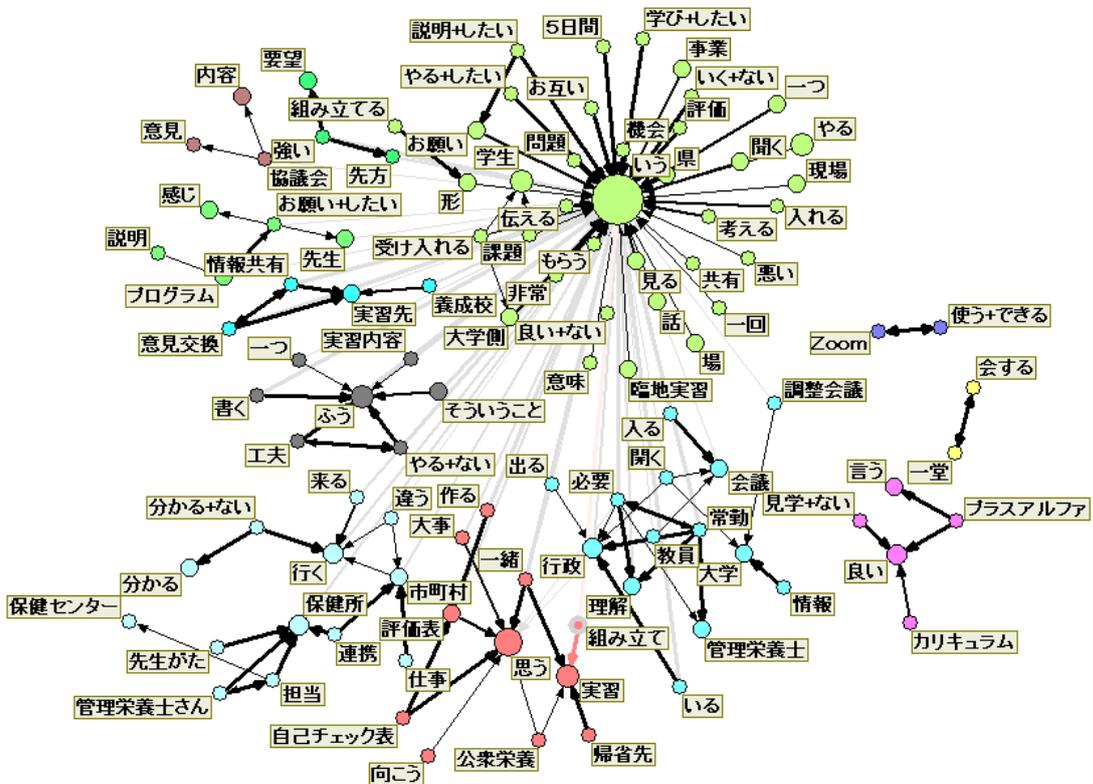


図4 大学で実習内容の取り決めをしているか（公衆栄養学臨地実習）

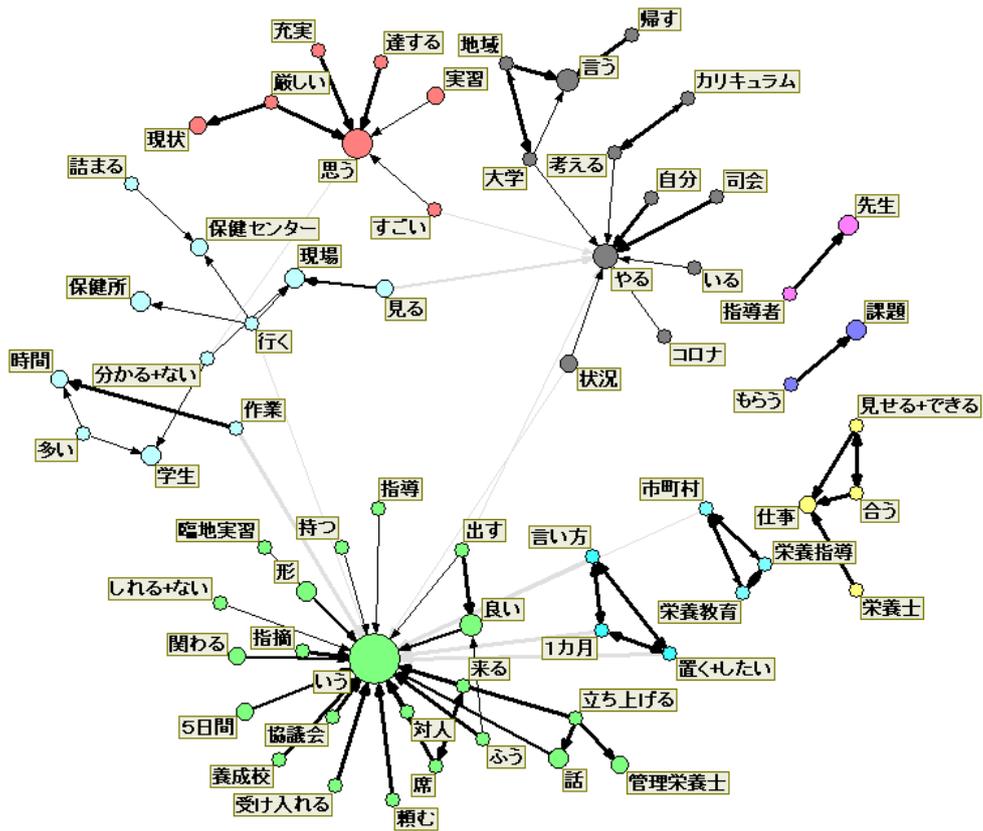


図5 自習時間が長いと感じているか（公衆栄養学臨地実習）

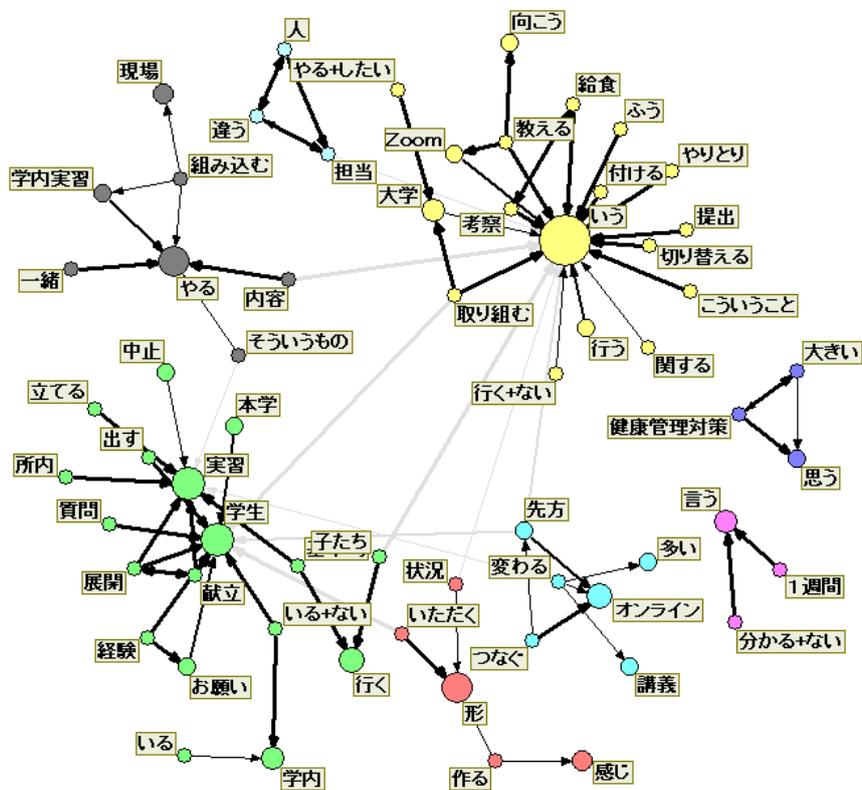


図6 コロナ禍の臨地実習においてどのような対策が大学で実施されたか

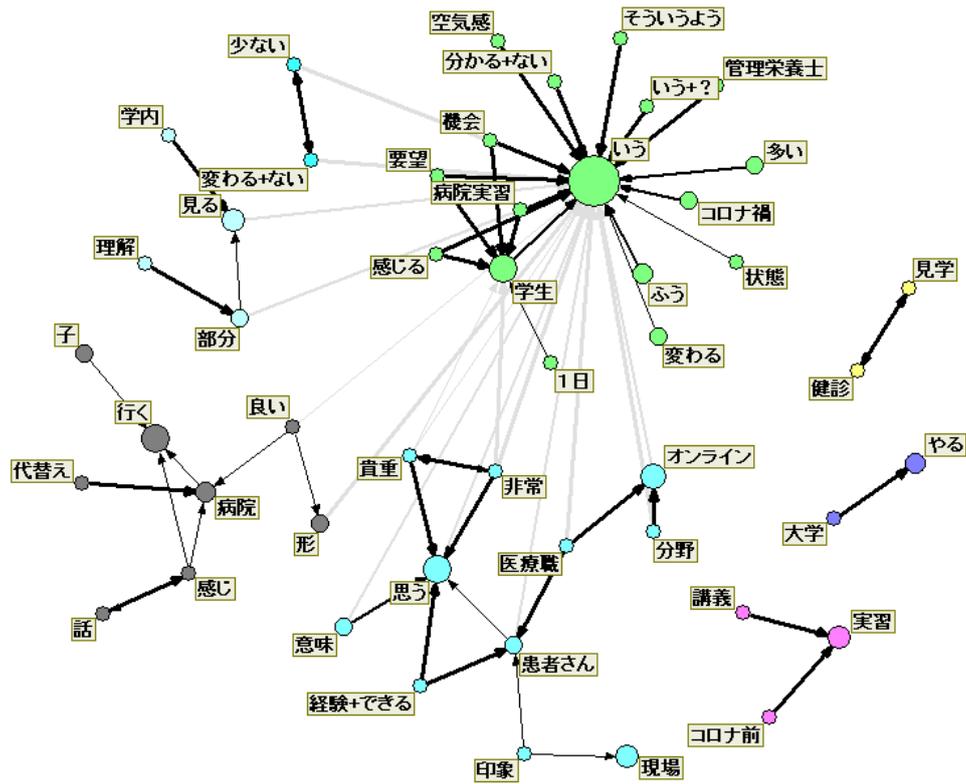


図7 コロナ前と比較し、臨地実習でどのような変化があったか

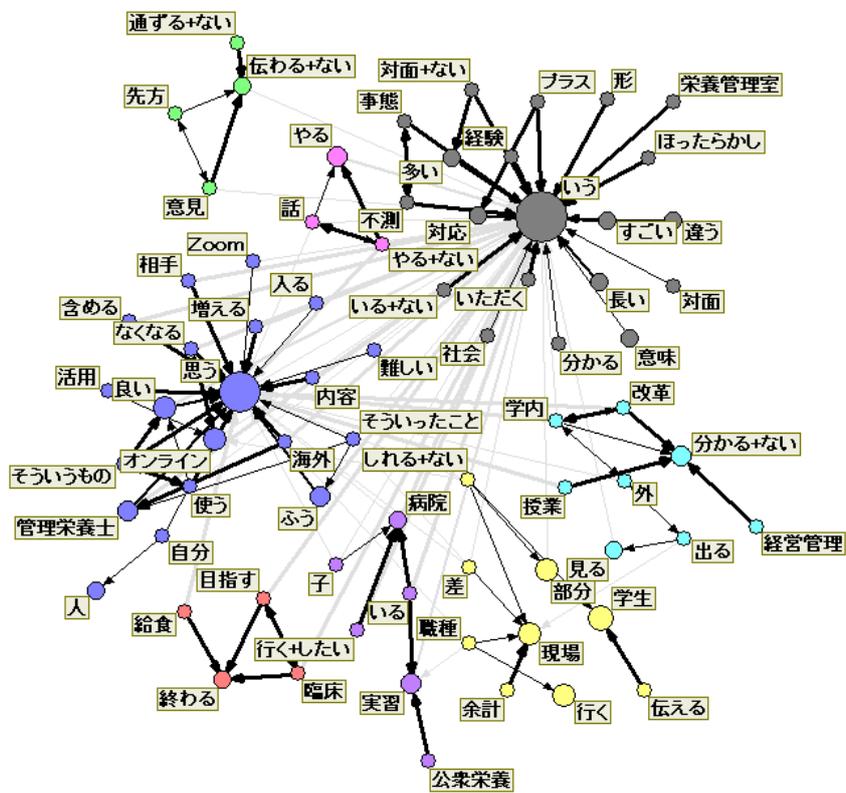


図8 コロナの影響を経て、どのような考察が得られたか

